

平成31年度
 劇場・音楽堂等機能強化推進事業
 (地域の中核劇場・音楽堂等活性化事業)
 成果報告書

団 体 名	公益財団法人仙台市市民文化事業団	
施 設 名	仙台市青年文化センター	
助 成 対 象 活 動 名	公演事業	
内定額(総額)	11,945	(千円)
公 演 事 業	11,945	(千円)
人材養成事業	0	(千円)
普及啓発事業	0	(千円)

1. 事業概要

(1) 平成31年度実施事業一覧【公演事業】

番号	事業名	主な実施日程	概要 (演目、主な出演者、スタッフ等)	入場者・参加者数	
		主な実施会場		目標値	実績値
1	名曲のちから 『オーケストラ・スタンダード』	1月29日、2月5日	指揮：渡邊一正、角田鋼亮 ヴァイオリン独奏：神谷未穂 ピアノ独奏：菊池洋子 管弦楽：仙台フィルハーモニー管弦楽団	目標値	1,650
		コンサートホール		実績値	866
2	おとなとこどものためのクラシック入門『仙台フィルのクリスマスコンサート』Vol.2	12月18日	指揮：松井慶太 管弦楽：仙台フィルハーモニー管弦楽団	目標値	450
		コンサートホール		実績値	269
3	子どもと大人のためのダンス 「日本昔ばなしのダンス」	9月28日	構成・振付：近藤良平、山口夏絵 出演：近藤良平、鎌倉道彦、藤田善宏、山本光二郎、山口夏絵、稲村はる、宮内愛	目標値	300
		シアターホール		実績値	313
4	Co. 山田うん2019年ツアー 「話のない物語」	11月7日	振付・演出：山田うん 出演：飯森沙百合、川合ロン、河内優太郎、木原浩太、黒田勇、田中朝子、西山友貴、仁田晶凱 ほか	目標値	399
		シアターホール		実績値	212
5	劇都仙台ミュージカル プロデュース公演	12月7日、8日	作品名「おかえり、ケヤキ食堂」 出演：市民公募参加者55名 総合監修：茅根利安 作・演出：渡部三妙子 振付：朝日雅宏・YOKO	目標値	650
		シアターホール		実績値	1,335
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	
				目標値	
				実績値	

2. 自己評価

(1) 妥当性

自己評価
<p>社会的役割（ミッション）や地域の特性等に基づき、事業が適切に組み立てられ、当初の予定通りに事業が進められていたか。</p> <p>仙台市青年文化センター（ネーミングライツ名称：日立システムズホール仙台）は、仙台市における舞台芸術文化の創造・発信の中核を担う施設として、「育成」「普及」「創造」、3つのミッションを掲げ事業を実施している。</p> <p>音楽専用ホールと多目的ホールを有し、音楽事業に関しては当館を拠点とする仙台フィルハーモニー管弦楽団の公演を、その他舞台芸術事業についてはダンスカンパニー等の招へい公演や、市民参加型のプロデュース公演を実施するかたちで近年の事業を組み立てている。</p> <p>平成31年度（令和元年度）の劇場・音楽堂等機能強化推進事業採択事業として、音楽2事業、舞踊2事業、総合1事業（ミュージカル）の合計5つの公演事業を実施したが、いずれの事業にもミッションの達成に貢献する手応えを得ることができた部分と、改善を必要とする部分があったと自己評価している。具体的には、公演事業は「普及」ミッションにはほぼ対応しているが、「創造」「育成」の要素に欠けてしまう傾向がある。</p> <p>事業の組み立てと計画・実行の管理に大きく影響するのは財源確保の安定性の問題がきわめて大きく、例年、助成金採択結果は、事業の実施規模や実施回数に影響している。またそれに関連し、公演の開催日・ワークショップ等の実施日が年度の後半に偏る傾向のあることも課題となっている。</p> <p>当初の予定通りに進められた事業は3事業、また、実施回数の減や予定内容の一部取りやめがあった事業が2事業、ほかに、要望したが実現できなかった事業が1事業あった。財務的な基盤や事業企画・準備・実施のサイクルを安定させ、さらにミッションの達成度を上げていくことが重要だと考えている。</p>
<p>助成に値する文化的、社会的、経済的意義等が継続して認められるか。</p> <p>評価の指標とした来場者アンケートや、外部人材を招いて事業視察いただいた評価委員会での結果を踏まえると、様々な観点から実施の意義は認められるものと考えている。音楽公演の来場者の15%以上、ダンス、ミュージカル公演の来場者の25%以上が市外からの来館者だったことなど、広域からの来訪による経済効果が認められるほか、公募出演者によるプロデュース公演の実施などにより多くの出演者・参加者間のネットワーク形成が進み、市民の自主的活動を含む仙台の文化芸術事業の活性化や、交流人口の拡大につながったものと認識している。</p> <p>今後さらに意義を高めていくには、公演への来場、事業への参加についてそれぞれ地域のニーズをより深く把握するための調査方法について検討し、とりわけ劇場での鑑賞者数の少ない若い世代のニーズ調査には力を入れ、創客の努力をする必要を感じている。</p>

(2) 有効性

自己評価

目標を達成したか。

主な評価指標としている来場者アンケート結果では、目標を達成した指標が「独自性・企画性が高い」(目標(以下同)70%→結果(以下同)90%)、「このような公演があればまた観たい」(80%→95%)の2指標、また、達成できなかった指標は「内容に対する満足度」(91%→89%)、「入場料・参加料が安いまたは妥当」(90%→85%)、音楽公演の「初めての鑑賞者比率」(10%→6%)、舞台公演での「初めての鑑賞者比率」(28%→15%)の4つの指標となった。

ほか、外部人材を招いての評価委員会での総合評価は(75%→82%)と上昇し、昨年度には達成できなかったこの指標を新規に達成することができた。

これら目標指標の達成度については、達成するたびに目標値を上げてきたゆえに届かなかった指標も含まれていると思うが、そもそも目標値を設定する際の考え方や調査手法を確立できなければ、評価も曖昧なものとなり、定数評価することの意義を下げってしまうとも感じている。この点については調査・研究を重ねたい。

音楽分野の新規鑑賞者の開拓、舞台芸術分野の集客数問題は当年度も依然クリアできていない。これは広報力と企画力の問題が大きいと考えている。SNS発信力強化などのWeb広報力のアップや、子供向け・親子向け公演の新たな広報手段の開発など、向き合うべき課題はいくつもある。

また、公演事業全体で目標に向かうという枠組みで評価を行っているが、個別の事業で見たとき、結果は違うものとなっている。たとえば市民参加型ミュージカルなどは、当初目標を大きく上回る来場者を得ている。全体で到達すべき目標を掲げながら、事業ごとの特性や実施目的も大切にしていきたいと考える。

(3) 効率性

自己評価

アウトプットに対して、事業期間が適切で、当初の計画通りに進んだか。
アウトプットに対して、事業費が適切で、当初の計画通りに進んだか。

事業期間については、最も長く準備期間をかけたのがミュージカルプロデュース公演で、制作は前年度から始まり、およそ10か月の制作・稽古期間を経て上演を迎えたがこれは計画どおりで、それだけの長さの期間をかけたことにより、公募出演者の表現力も作品の質も高いレベルに仕上がりに、入場料に相応しかったというアンケート評価もいただけたのだと思う。その他の公演についても、概ね当初の計画通りのスケジュールで準備を進めることができた。

事業費については、当初の収支予算計画に対し入場料収入が27%の減、総支出額は10%の減の決算となった。一番の問題は入場料収入の不足だと考えられる。収入予算の立て方には強気・弱気など曖昧さが伴うことがあるので、収支の決算額バランスで見ると、舞踊公演、次いで音楽公演の成績が振るわなかった。対して全5事業のなかで最も結果が良かったのが市民参加型ミュージカル公演で、収入は全事業のなかで最大となり予算額も達成した。プロデュース型公演でこのような良い結果を収めることができたことは、今後さらに、地域性を重視した創造型の劇場としての機能を強化していくための自信につながるのではないかと感じている。その他事業費については、もう少し多く広報費に予算を割いても良いと思う事業があった。

(4) 創造性

自己評価

地域の文化拠点としての機能を最大限に発揮する優れた事業であった（と認められる）か。

音楽事業として、当館の音楽専用ホール「コンサートホール」の特長を最もよく理解し、引き出すことのできるオーケストラ、仙台フィルハーモニー管弦楽団のコンサートを継続して開催。当館が仙台市における音楽文化の拠点を担うホールであること、また、すぐれた音響をもつホールであることをPRするとともに、親子向けの廉価で気軽に来場できるコンサート「仙台フィルのクリスマスコンサート」などの開催を通じ、クラシック音楽にあまり馴染みのない新規客や、次世代の観客層を広げるための活動を展開している。

また、舞踊等の公演に適した多目的ホール「シアターホール」では、日頃劇場に足を運ぶ機会のない鑑賞ビギナーの方々を含め、気軽にダンス表現に親んでいただいた公演「日本昔ばなしのダンス」、また、地域ではなかなか鑑賞する機会が少ない高い芸術性で観客を魅了した「Co. 山田うん 話のない物語」の2本のダンス公演を招へい。地域をリードしていくべき拠点施設として、日本のダンスシーンを代表する表現者たちによる多様な舞台作品を紹介することで、新しい刺激を生み活性化を促す機会となった。

そして公募出演者および地域の作家・制作者によるミュージカルプロジェクト「おかえり、ケヤキ食堂」は、当館完全オリジナルの作品となり、「育成」「普及」「創造」、3つのミッションへの貢献を兼ねそろえた事業を実現することができた。

自己評価

地域の実演芸術等の振興など、地域の文化芸術の発展につながっていた（と認められる）か。

文化拠点として展開してきたこれらの事業群が、地域の実演芸術の振興にも繋がっているという手応えは得られている。ただ今後の発展性について考えると、継続事業については、弛まず続けていくことの価値ばかりでなく、ニーズ調査を踏まえ企画内容を見つめ直すなど、改善しながら実施していくべき点も多いと自己評価している。

また公演事業の開催は普及啓発の意義を合わせもつと考える。国内外で活躍する実演家達の公演に触れることで、鑑賞者として未知の楽しみを知ることができたり、表現者として活動している人々にとっても新たな刺激を得られるなど、さまざまに活性化を促すものだったことが来場者アンケートからも伺えた。当年度の採択事業とはならなかったが、人材育成、普及啓発を目的に前年度から継続して実施した身体表現に関するワークショップ「せんだいダンスプロジェクト」も、そのような役割を果たしてきている。

劇場の特性、また運営を担う文化財団の特性を活かし、表現分野や、ターゲットとなる鑑賞者をバランスよく考慮して公演事業を開催することで、地域の実演芸術全体の底上げや、広がりへの創出に貢献できたと考える。

(5) 持続性

自己評価

事業を通じて組織活動が持続的に発展した（と認められる）か。

実施事業の検証・改善を目的に、外部人材の目を入れた評価を過去2年間にわたって継続してきた結果、さまざまなフィードバックを得てきており、今後これらを生かし変革を起こしていけるかが活動の発展の鍵をにぎっていると思うが、現在はまだその途上にある。これまで行ってきたような各芸術分野の専門家からの評価だけでなく、市民のニーズ、世代間のニーズ差などの調査に力を入れ、改善を図っていきたい。

また何より今般の感染症の流行を受け、当面の間免れることはできない実演芸術の実施を取り巻く大きな問題に対応していくため、従来の計画、事業に対する考え方、経営戦略について、全般的に見直しを図らねばならない局面を迎えた。変化に対応せざるを得なくなったことを強く自覚することからスタートするしかないだろう。

また当施設は大規模改修のため令和2年度10月より1年間の休館が予定されており、この期間を有効に利用し、改修後の事業計画、劇場の機能強化についても検討していきたい。